みなとまち新潟 歴史探訪46

問 歴史文化課
☎025-385-4290

復興のシンボルとなった市陸上競技場の炬火台

新潟市陸上競技場の炬火台は火焔型土器の形をしています。そのデザインのきっかけは、昭和39(1964)年に開催された前回の東京オリンピックにありました。

昭和34(1959)年、夏季オリンピックの東京開催が決定すると、長岡市出身の小説家・松岡譲は火焔型土器の形の聖火台を提案しました。残念ながらこの提案は採用されませんでしたが、オリンピックと同年の6月に初めて新潟県で開催された、第19回国民体育大会(国体)の主会場である同競技場の炬火台にこの案が採用されたのです。炬火台は、徳昌寺遺跡(長岡市)や馬高遺跡(同)から出土した土器を参考に制作されました。

国体開会中に火がともり続けていた炬火台は、閉会から5日後の6月16日に発生した新潟地震でひび割れ、傾いてしまいました。その後、10月1日にオリンピックの聖火が新潟県入りすると、補修された炬火台に再び火がともりました。その火は地震で被災した市民に新潟国体の感動を呼び起こし、炬火台は復興に向けたシンボルとなったのです。

点火された炬火台(新潟国体開会式)